



大妻多摩中学校

二〇一八(平成30)年度

入学試験問題(第二回合科型)

〔作文試験〕

時間 60分

2月2日(金)

【注意事項】

- 1 問題は6ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。
- 4 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 5 問題冊子の7～8ページは下書き用として活用してください。

次の文章は、一九八〇年代後半に発表されたものです。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私は、歴史小説を書いてきた。

もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようにして、歴史を愛している。

歴史とはなんでしょう、と聞かれるとき、

「それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこにつめこまれている世界なのです。」
と、答えることにしている。

私には、幸い、この世にたくさんすばらしい友人がいる。

歴史の中にもいる。そこには、この世では求めがたいほどにすばらしい人たちがいて、私の日常を、はげましたり、なぐさめたりしてくれているのである。

10 だから、私は少なくとも二千年以上の時間の中を、生きているようなものだと思っている。この楽しさは——もし君たちさえそう望むなら、——
〔注1〕おすそ分けしてあげたいほどである。

ただ、さびしく思うことがある。

私が持っていないくて、君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。

私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、21世紀というものを見ることができないにちがいない。

15 君たちは、ちがう。

21世紀をたっぷり見ることができればか、そのかがやかしいにない手でもある。

もし「未来」という町角で、私が君たちを呼びとめることができたら、どんなにいいだろう。

「田中君、ちよつとうかがいますが、あなたが今歩いている21世紀とは、どんな世の中でしょう。」

そのように質問して、君たちに教えてもらいたいのだが、ただ残念にも、その「未来」という町角には、私はもういない。だから、君たちと話ができるのは、今のうちだということである。

もつとも、私には21世紀のことなど、とても予測できない。

ただ、私に言えることがある。それは、歴史から学んだ人間の生き方の基本的なことでもある。

25

昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水、それに土などという自然があつて、人間や他の動植物、さらには微生物びせいぶつにいたるまでが、それに依存いそんしつつ生きていくということである。

自然こそ不変の価値なのである。なぜならば、人間は空気を吸うことなく生きることができないし、水分をとることがなければ、かわいて死んでしまう。

30

さて、自然という「不変のもの」を基準に置いて、人間のことを考えてみたい。

人間は、——くり返すようだが——自然によって生かされてきた。古代でも中世でも自然こそ神々であるとした。このことは、少しも誤っていないのである。歴史の中の人々は、自然をおそれ、その力をあがめ、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。

その態度は、近代や現代に入って少しゆらいだ。

35

——人間こそ、いちばんえらい存在だ。

という、思いあがった考えが頭をもたげた。20世紀という現代は、ある意味では、自然へのおそれがうすくなった時代といつていい。

40 同時に、人間は決しておろかではない。思いあがるということとはおよそ逆のことも、あわせ考えた。つまり、私ども人間とは自然の一部にすぎない。というすなおな考えである。

このことは、古代の賢者(けんじや)も考えたし、また19世紀の医学もそのように考えた。ある意味では平凡(へいぼん)な事実にすぎないこのことを、20世紀の(注2)科学は、科学の事実として、人々の前にくりひろげてみせた。

20世紀末の人間たちは、このことを知ることによって、古代や中世に神をおそれたように、再び自然をおそれるようになった。

45 おそらく、自然対しいばりかえっていた時代は、21世紀に近づくにつれて、終わっていくにちがいない。

「人間は、自分で生きているのではなく、大きな存在によって生かされている。」

と、中世の人々は、ヨーロッパにおいても東洋においても、そのようにへりくだって考えていた。

50 この考えは、近代に入ってゆらいだとはいえ、右に述べたように、近ごろ再び、人間たちはこのよき思想を取りもどしつつあるように思われる。

この自然へのすなおな態度こそ、21世紀への希望であり、君たちへの期待でもある。そういうすなおさを君たちが持ち、その気分をひろめてほしいのである。

そうなれば、21世紀の人間は、よりいっそう自然を尊敬することになるだろう。そして、自然の一部である人間どうしについても、前世紀にもまして尊敬し合うようになるにちがいない。そのようになることが、君たちへの私の期待でもある。

さて、君たち自身のことである。

君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。

——自分に厳しく、相手にはやさしく。

という自己を。

60 そして、すなおでかしこい自己を。

21世紀においては、特にそのことが重要である。

21世紀にあつては、科学と技術がもっと発達するだろう。科学・技術が、こう水のように人間をのみこんでしまつてはならない。川の水を正しく流すように、君たちのしっかりと自己が、科学と技術を支配し、よい方向に持つてほしいのである。

65 右において、私は「自己」ということをしきりに言った。自己といつても、自己中心におちいつてはならない。人間は、助け合つて生きているのである。

私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画^{かく}がたがい^{たがい}に支え合つて、構成されているのである。そのことでもわかるように、人間は、社会をつくつて生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。

70 原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいに助け合いながら生きているのである。

自然物としての人間は、決して孤立^{こりり}して生きられるようにはつくられていない。

このため、助け合う、ということが、人間にとつて、大きな道徳になっている。

助け合うという気持ちや行動のものとは、いたわりという感情である。

他人の痛みを感じることに言ってもいい。

75 やさしさと言いかえてもいい。

「いたわり」

「他人の痛みを感じることに」

「やさしさ」

みな似たような言葉である。

80 この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。

根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけなければならないのである。

その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中でつくりあげていきさえすればよい。

この根つこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

85 君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、21世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるのにちがいない。

(しばりようたろう司馬遼太郎『二十一世紀に生きる君たちへ』〔朝日出版社〕より)

注 1 おすそ分け ————— よそからもらったものや利益などを、すこし分けてやること。

2 科学 ————— 一定の方法のもとに、対象を組織的・系統的に研究し、実験し、調査する学問。

問 著者のメッセージを読んで、あなたはこれからの未来をどのように生きていきたいと考えましたか。「グローバル社会」という未来で生きていくことを想像しながら、四百字程度でまとめなさい。なお、本文の内容も参考にすること。

《解答する上での注意》

- ・ 縦書きで書くこと。
縦書き
- ・ 書き出しと段落の最初は、一マス空けること。
- ・ 句読点や「」「」なども原則として一マス使うこと。ただし、行の先頭にきてしまう場合は、前の行の最後のマスに付け加えること。
- ・ 文末の表現は「です・ます」でも「だ・である」でもよいですが、文体は統一して用いること。

メモ欄 7～8ページは下書きに使ってもよい。

